

「われらはバビロンの川のほとりにすわり、シオンを思い出して涙を流した」

(詩篇 137:1)。

これは、捕囚の民イスラエルの悲しみです。彼らの悲しみは、彼らの神が馬鹿にされたことです。バビロンの民から、「お前たちの神はどこにいるのか。頼りにならない神よりは、バビロンの神々を拜んだらどうだ」と嘲笑されたというのです。

「我らをとりこにした者が、我らに歌を求めたからである。我らを苦しめる者が楽しみにしよう、『シオンの歌をひとつ歌え』と言った。我らは外国にあって、どうして主の歌を歌えようか」(137:3)。

座興として、「ハレルヤの歌を歌え」と言われました。「ハレルヤ」などと口にすれば、たちまち「お前たちの神は無能な神だ、そんな神など早く見切りをつけてしまえ！」と侮られたというのです。

わたしたちもまた、バビロンというこの世にあります。主イエスを信じているので、すべて順調、とは限りません。信仰はわが身に悪いことが起こらないための事前の「お守り」ではありません。

それで、イスラエルの民はバビロン川のほとりで涙しながら祈りました。

「エルサレムよ、もし私があなたを忘れるならば、わが右の手を衰えさせてください」(137:5)

一、困難な状況であろうと、神への信頼を見失うことがないようにと祈りました。

悲しい出来事が起きます。それが仕事や家庭の問題であるかもしれません、時には、親しい家族や友との死別もあるでしょう。

「バビロン捕囚」という厳しい試練中で、神の深いなぐさめへと導かれています。

人間的に言えば、バビロン捕囚とは、神から見放されたことといえます。しかし、どんなにつらい苦境であっても、恵み深い神が、このわたしと共におられるのだということに気づいたとしたら、何と幸いなことでしょうか。

捕囚の民に向かって、神は預言者エゼキエルを通してこう語られました。「主なる神はこう言われる、たとい、わたしは彼らを遠く外国人の中に移し、国々の中に散らしても、彼らの行った国々で、『わたしはしばらく彼らのために聖所となる』」(エゼキエル 11:16)。

「彼らのために聖所となる」とは、何とも不思議な驚くべき約束でしょうか。最後まで耐え忍ぶ者でありたいと願います。

「試練を耐え忍ぶ人は、幸いである。それを忍びとおしたなら、神を愛する者たちに約束されたいのちの冠を受けます」(ヤコブ 1:12)。